


学 位 論 文 審 査 の 要 旨

論文提出者	武田 進平		
論文審査委員	(主 査) 朝日大学歯学部教授	吉田 隆一	
	(副 査) 朝日大学歯学部教授	土井 豊	
	(副 査) 朝日大学歯学部教授	田沼 順一	
論文題目			
α -TCP/Te-CP セメントの覆髄剤への応用			
<p><u>論文審査の要旨</u></p> <p>歯髄組織は象牙質・歯髄複合体として可能な限り保存すべきである。そのため、深在性齲蝕や外傷等による偶発的露髄に対しては直接覆髄が行われる。現在、直接覆髄剤として主に用いられている水酸化カルシウム製剤は早期に被蓋硬組織を形成し、その形成量も多い。しかし、この製剤は pH12.5 の強アルカリ性のため歯髄刺激が強く、場合によっては、広範囲な歯髄壊死を生じることや、形成された被蓋硬組織は裂隙を認め、多孔質であるため辺縁漏洩による感染の危険性があることなどの問題点も指摘されている。一方、リン酸カルシウム化合物からなる α-TCP/Te-CP セメントは、生体親和性が高く、硬組織を誘導するため注目されている。</p> <p>本論文では、α-TCP/Te-CP セメントの理工学的諸性質に及ぼす種々の練和液の影響を先ず調べ、さらに、ラット臼歯露髄面に本セメントを応用し、歯髄反応と被蓋硬組織の形成について病理組織学的に検討し、最終的には α-TCP/Te-CP セメントの覆髄剤としての有用性を評価したものである。</p> <p>その結果、α-TCP/Te-CP セメントは練和液や練和条件によりその性質を変化させることができ、適当な強度を有し、比較的短時間で硬化することが示された。また、硬化に伴い最終安定相のアパタイトを形成することが示された。動物に覆髄剤として応用すると、歯髄に明らかな炎症細胞を認めず、露髄面には細管構造を有する質の高い被蓋硬組織を形成することで、優れた露髄面のも封鎖性を示すことも確認できた。</p> <p>本論文は、α-TCP/Te-CP セメントが覆髄剤として必要な理工学的性質を有し、動物実験に応用すると、露髄面に細管構造を有する質の高い被蓋硬組織を形成することを確認することによって、覆髄剤としての有用性を示唆し、直接覆髄法の治療成績の向上を期待できることを示している。</p> <p>以上の結果を評価し、本論文は博士（歯学）の学位を授与するに値すると判断するものである。</p>			